

『唯識三十頌』後半の諸問題

——心理学的考察

北 村 晴 朗

唯識佛教のもっとも重要な典拠である世親の「唯識三十頌」には三つの柱があるといわれる。心識論、三性論および修道論である。心識論はもっとも詳しく、三十頌のうち十九頌までがこれにあてられる。その心理学上の主要な問題点についてはすでに一通り考察したが、その総括部分にあたる第十七頌から第十九頌については未だ検討の暇がなかった（北村二〇〇一）。

本稿ではこの部分を改めて吟味し、さらに第二十頌から第二十五頌までの三性論に関する部分と第二十六頌以下の修道論について検討するものである。その解釈については玄奘の漢訳した成唯識論に主として従い、それらの和文については、黒田、竹村および太田の著書を参考とした（黒田一九四四年、竹村一九九二、太田一九九四）。

（一） 九難義について

これは第十七頌の主要問題である。まずこの頌を見よう。

是諸識轉變（この諸識は転変して

分別所分別 分別たり、所分別たり

由此彼皆無（これによつて彼（分別と所分別）は皆無し。

故一切唯識（故に一切唯識なり）

その主旨。すべての識は分別する側と分別される側とに分れてはたらく。だからそれは客体的なものではなく、本当は無である。故に一切のもの（我

と法)は唯識である(太田)。

しかし、ただ分別のみ、識のみということで、果たしてこの世界が一定の秩序を保っているように見えることが解明されるであろうか(竹村)。ここで成唯識論は九の論難を設定し、それに対する答えにより、唯識説の妥当性を論証しようとするのである。

なお九難義については、黒田には言及なく、太田は一部についてのみ語るので、竹村の説明に負うところが多い。

① 唯識所因難。これは何の教と理とによって唯識説が支持されるかという問いである。唯識を支持する教としては、華嚴經の十地品、楞伽經、阿毘達磨論中の一水四見等の説を中核とする説明があげられ、理すなわち理論的根拠としては、五感をはじめ、他の三識の認識はそれぞれ自識内の対象(内容)を認識することに他ならないことが指摘される。

② 世事乖宗難。唯識では、世界が客観的に、時間的・空間的秩序をもって現れていることを、いかに説明できるかという論難である。これに対して成唯識論は、われわれの主観がつくった夢の世界がその体験者には、客観的に存在すると同様であるという答えを与えている。成唯識論の和訳者島地大等)はさらに詳しい説明を加えている。そのうち身と用とに関して述べたところを引用する。身とは有情すなわち生類で、多くの人が同一の事物と認知することも、同じ業を積んだ者は、同じ外境を経験するという事実によって説明され、用たとえば発汗などの作用が夢の中で行われることもあるので、作用が実際の境の存在を保証するわけではないなどと説明されている。

③ 聖經相違難。世尊が六根と六境の十二処を説かれているので、対境を認知する六種の認識能力とその対境となる色、聲、香、味、触、法の六境とが存在するのではないかという疑問である。これに対して世尊は識があらわれ出したものに、もとづいて説いているので、別に実体があると言っているのではないと説明される。

④ 唯識成空難。一切の我と法(事物)は実体がなく、存在せぬというならば、唯識性もまた空無ではないかという論難である。これに対する答えとしては、識の世界もその依拠するものは有であり、その本性としての眞如(実在)も無ではない。ただ執著されるべきものはないと説くのである。

⑤ 色相非心難。一切が唯識なのに、いかにして不変のものがあるかのように現われているのは何故かという疑問である。これに対して人が言語を習得する際に、それが示す物があるかのように思いこまれるというのが第一の答である。第二の答としては欲界と色界等に住む人間に識の所現を実体とみる顛倒の認識があるからこそ覚があるという答で、これは副次的な答である。ここで唯識が言語の習得が認識に及ぼす大きい影響を強調したことは十分意味があることである。出世魚と呼ばれる魚は、成長するにつれ、呼び名を変え、また昔の人も幼少の時と青年期以降さらに隠居後とは、名を変えたり、新しい名をつけ加えたりする場合が少なくなかった。本人の外貌・行動や意識のあり方に即して考えれば、同一の名前で呼ぶよりも一層

妥当であると言えるであろう。時には、本人が選定した雅号やよび名が本名よりも、本人を指示する上で有力であることもある。夏目漱石や幸田露伴はその例であるが、その号で幼童のときの姿を想像することは、不可能であろう。

⑥ 現量為宗難。色等の外境は直接認識で認められるかぎり無とはなし得ないのではないかという疑問である。ところが色等をば分別、推量を加えずに、現にあるままに直覚する際には、物や外界の存在感は伴わない。外物、外境の存在感は、意識の所産に外ならないというのがこの論難に対する答である。

⑦ 夢覚相違難 この世界が夢というなら何故覚めたときに夢と気づき得ないのかという質問である。これに対して、ここでいう夢は無明長夜の夢のことで、普通はそのなかに生活していて、覚めることはない。覚めてはじめて、無明の夢のなかにいたことがわかる点では、普通の夢と変わらないが、無明長夜の夢からさめることは、真の覚者にのみ可能で、凡夫には体験できないことである。

⑧ 外取他心難 外境は無であるとしても、他人の心は依然として存在するのではないか、つまり唯識とは言えないのではないかという問いである。これに対して唯識は、識外の他心の存在を否定するのではなく、心識の境として顯れている他人の心の存在を否定するのであると答えるのである。心識の境としての他人の心の姿に関しては、なお考察する必要があるが、それは後にゆずることにする。

⑨ 異境非唯難。前項でいうように、他人の心という心外の内容を認めるのなら、唯識のみとはいえないのではないかという疑問である。これに対しては、心外の内容といってもそれ自体はやはり識としての存在に外ならないのだから、唯識ということに矛盾はしないという答えが用意されている(竹村)。

ここで成唯識論は總括的に二つのことを説く。一つは唯識がいわゆる独我論を主張するわけではないことである。つまり菩薩が一般の衆生に対して説法したり、布施行を行ったりすることを当然の事とするのである。次には、心外の内容を認めると言っても心外の事物の真相は普通の人には、とらえられないことである。物自体のように設定されているが、それは認識の対象としてはとらえられず、ただ存在が仮定されるのである。眞如、眞理は一つであるが、人の修行の進み方によって顯われ方が変わる。そして修行の最高の段階では眞如そのものの開明があると考えられるのである(竹村・太田)。

(二) 四縁とその問題点

これを説く第十八頌は次のようである。

由一切種識（一切の種識（阿頼耶識）により

如是如是変　かくの如くかくの如く変ず、

以展転力故　展轉する（交互の）力の故に

彼々分別生　彼々の分別生ず）

その主旨。一切種識に保持されている種子によってさまざまな世界を表現する。そして、それが相互に持続しかかり合うことによって種々の分別が生じる（太田）

さて諸識相互のかかり方を明かにするために成唯識論は四縁と十因と五果をあげて、説明する。

まず四縁とは因縁、等無間縁、所縁縁および増上縁である。因縁とは種子と現行（種子が成長したもの）との直接的な依存関係をいう。すべての現行は種子なしには生じ得ないし、種子は現行を離れては存在し得ない関係をいう。等無間縁とは性質の等しい心・心所が前のものに続いて生起することをいう。ある心・心所が連続的に生じるためには、前にあったものが、滅するとともに他のものが介入する間をおかず同種のものが現れる必要があることをいう。

所縁縁。心識は外境（対象や環境）によって生じることがある。この時心識を生じる外境を所縁縁という。これに親所縁縁と疎所縁縁とがある。親所縁縁は作用を行う心識の対境のうちで親しいもの、直接的なものであり、疎所縁縁は親所縁縁の背後にあつて間接的な対象とみられるもので、これには直接的にはとらえ得ない本質がある場合もあれば、それがない場合もある。

増上縁。以上の三縁以外の。現象の生起にかかわるすべての縁をいう。これについてはその現象の生起を積極的に支える力と、その現象の生起を妨げない消極的な条件とがある。

右の四縁のうちで唯識の理論上、問題となるのは、所縁縁についての考え方である。所縁縁のうち、親所縁縁は、主観に感知される現象を生起させる外境という意味で、理解されやすいものであるが、疎所縁縁にはその奥にあると推知される本質的なものが考えられる場合がある。それは現象の根基にあると想定されるが、直接的には認識の対象とはなり得ないものである。

先にあげた九難義のうち⑧外取他心難への解答で述べたように、唯識説は疎所縁縁を立てることによって、本質としての他心の存在を肯定し、独我論を免れている。しかし親所縁縁としての他人のあり方はそれを認識する主観のあり方等によって著しく異なるものになる。

唯識の強調する点は、人が修道の程度に応じて異なる親所縁縁のあり方をみていることである。そして一切の衆生に悉く佛性を認める人は、衆生の

本質として親所縁縁の背後の疎所縁縁にも同様の仏性を推知することになるが、唯識説では五姓各別の考え方によってこの考え方に制限を加えている。親所縁縁としての他の人の姿のとらえ方は見る人のあり方によって大いに異なる。相手が変れば、まるで人が変ったように振る舞う人は決して少くはない。自分の行動、態度が相手の出方次第で変わると公言してはばからないような人さへある。われわれは、自分のあり方、出方によって、相手を良くもし、悪くもしている面が少くない。

このことは、見る主体の人間観が相手のあり方を変え、形成するはたらきをもつことを示唆する。このような人物の典型は、ドストエフスキーの「カラマゾフの兄弟」の末弟アリョーシアとして描かれている。

アリョーシアは多くの人びとに、眼をそむけしめるような浅ましい姿や心の乱れがあることを認めないわけではないが、その奥の魂には美しい清らかな宝がひそんでいることを信じ、同時に具体的な人間はまだ未熟であるので、いたわり、世話をし、時には看護してやる必要があると考えるのである（北村一九九一）。

衆生に対しその苦を除き、樂を与える慈悲をほどこすことは、仏教の中心的徳目の一つであるが、それが十分できるには、修行が要るとされる。どんな人間にも慈悲をもつて接し、しかもそれを通して解脱への道に進むように導くことは、高度の修行を積んだ人ではじめてなし得ることなのである。慈悲はこの意味で修行の進んだ菩薩にのみ可能ないわゆる菩薩行と考えられるのである。

ここで現われる一つの問題は、一切衆生に対する慈悲の心が、アリョーシアに見られるように、自己を凡夫と認める自覚と一緒に同一の個人に共存する契機を明らかにすることである。そこには二つの考え方がある。一つはアリョーシアに代表されるように、われわれを含む多くの人は未だ未熟な段階にある凡夫だという自覚である。『われ必ずしも聖に非ず。かれ必ずしも愚にあらず、共にこれ凡夫のみ』という聖徳太子と同じような自覚である。これは凡聖一如の自覚であって、菩薩が凡夫に対して感じる謙虚な反省の所産であり、凡夫が菩薩に対して感じる自己肯定の声ではない。『宗教的实践の主体は、煩惱を否定しようとすればするほど、それがきわめて執拗な（中略）ものとして主体にからみついていることを知』り、『自らを（中略）生来の凡夫として自覚するのである』（服部一九七五）。

もう一つは、一切の衆生に佛性があることを強調する立場である。これは根本的な観の轉換が得られる菩薩修行の高い段階の成果である。この段階になると、心は本来、清浄であることが理解され、菩薩行が成立ち、慈悲の言動が自然的に行われるに至る（服部一九七五）。

苦を除き、樂を得たいという衆生の願いにこたえる菩薩の最初の施しは、慈悲の言動であり、究極の誓願は解脱の悟りに導くことにあるので、どんな愚痴の人でも本質は清浄無垢で、煩惱にとらわれた言動でも菩提心を含むとの確信がなければ、その慈導は、不可能なことなのである。

(三) 十五依処と五果

四縁の説を一層詳しく説明するために、成唯識論はさらに十五依処、および五果について述べる(巻の第八)。なお依処とは因と同義であり、十五依処は十因にまとめられる。

- ① 語依処 意味を説くとき、はじめに使用される語の規定が、その説明の因となることで、随説因とも言われる。
- ② 領受依処 最初に期待したことが事を成就せしめる因となる。観待因に相應する。
- ③ 習氣依処 内外の種が未だ成熟しない時にも、すでに果を牽引する力をもつ場合で、牽引因に相應する。
- ④ 有潤滅依処 内外の種が成熟した際には近い果をひき起す生起因に対応する。
- ⑤ 無間滅依処 前念の心・心所が滅することによって、新しい心・心所が現われる。心を寛にして他を容れる攝受因の一つ。
- ⑥ 境界依処 ⑦ 根依処 ⑧ 作用依処 ⑨ 土用依処(作用をする本人の所作) ⑩ 真実見依処(無漏の種子を見ること)。以上は種子以外の疏縁が果を起す攝受因にまとめられる。

- ⑪ 随順依処 善・悪・無記の法の現行および種子が同類のもの、および波羅密多の修行また煩惱を離れた菩提心を引き起こすこと(引発因)
- ⑫ 差別功能依処 衆縁の合離によって生滅する有為法がそれぞれ特殊の果をおこすこと(定異因)
- ⑬ 和合依処 右の②から⑫までの諸因が果と和合することに着目して同事因が立てられる。同事とは仏・菩薩が衆生のあり方に従って、これと事を同じくして教化することである。

⑭ 障礙依処 事物が生じ住し成じ得せられることにおいて礙をなすもの(相違因)をいう。

- ⑮ 不障礙依処 事物を生じ住し成じ得せられる際において礙げず順益を為すこと(不相違因)をいう(以上では字井の佛教辞典をも参考とした)。
- 成唯識論は十因と四縁、五果との関係等を説き、因縁論を總括している。十因は四縁にわりあてられる。その名称はすでに十五依処に即して述べた(竹村)。

五果とは、果が因と異なる場合すなわち異熟果、果が因に等しい、類似している場合等すなわち流果、煩惱の繫縛を断離した無漏の力によって現れる涅槃の状態すなわち離繫果、因の作用によって得られる土用果および増上縁によって生じる色々の果すなわち増上果の五種の結果である。一切の事物はすべて原因によって生起されるが、原因は直接的な因と間接的な縁との二つ以上によって果を生ずるものである。一因によりて果生ずというは、無

因にして果を生じると考えるのと同じく、間違つた説であるといわれる。

(四) 生死輪廻の構造

第十九頌は一切が唯識なのに何故にわれわれの個人性が生死を貫いて持続され、自業自得の経過が保たれるかという問いに答えるもので、その解説は成唯識論卷の八にある。

由諸業習氣 (諸業の習氣と)

二取習氣俱 二取の習氣と俱なるに由りて

前異熟既盡 前の異熟すでに盡くれば

復生餘異熟 また余の異熟を生ず

主旨。業の後に生じる種子による一定の果報が盡れば、また別の果報が生じることをいう。習氣は種子のことであり、二取習氣とは二取(所取・相分と能取・見分との実体)に執する心によって熏習された種子のことであり、実体としての二取を執する主体は第六意識であるというのがもつとも有力な説である。そのほかにもいくつかの説があるが、名言習氣と我執習氣とみる見解も有力である(黒田、竹村)。

前の異熟が尽き、次の果熟が生じるには、なお別の縁の助けが必要である。それを説くのが十二縁起説である。唯識はこうして、一切唯識でありながら、生死を貫く業果の存在が説明できるとしたのである。

十二縁起は無明を出発点として衆生がどのような生死流轉をかさね、ついに悟りの道に進むかを説明した迷界の十二の因果関係を示したものである。無明(根本煩惱の一つ。癡)行業、識、名色(未発達の五蘊)、六入(眼、耳、鼻、舌、身、意の未発達なる段階)、觸(境に對せしめる心作用)、受(感情)、愛(渴愛)取(執著)、有(未來の結果を生じる業を作る位)、生(來世における新生)、および老死の十二である。各項の縁起は、(一)無明により行業が、(二)行業により識が、(三)識によって名色が(四)名色によって六入が、(五)六入によって觸が(六)觸によって受が、(七)受によって愛が、(八)愛によって取が、(九)取によって有が、(十)有によって生が、(十一)生によって(十二)老死が現われるという順序になる。

なおここで縁起というのは因縁生起の意味で、現象界の一切の因果関係をまとめて記したものである。

十二縁起説は、阿毘達磨俱舍論などでは、人間の全生涯を過去世、現世、未來世にわたる因果関係を意味するものと解釈されてきた。無明と行業は過去世のことを示し、それによって培われた識が働いて新しい生命体がつくられ、色名が生れ、次に六入が現われ、それによって外境に接して受が生

じ、さらに渴愛と執著が働き、現世の営みとなり、次に未来世のために有という業因をつくり、その結果、新しい生と老死とを展開することになる。

なお十二縁起説は古来、胎生学的な解釈が施される。それによれば、無明と行業は過去世のあり方、識、色名、六入は胎児期、觸は嬰兒期、受は童児期、愛は思春期、取は成人期、生と老死は未来世における生まれてから死ぬまでの一生を指すことになる（黒田、高崎）。

さて、人は佛にならない限り、このように生死流転をくりかえすが、凡夫のときや修行が未熟の段階にあるときと、高度の修行に達したときとでは、生死輪廻の意義が大きく異なる。成唯識論は、生死に分段生死と不可思議変生死の二種類があると語る。分段生死は凡夫や修行の未熟な者の寿命が定まっている場合であり、不可思議変異生死とは衆生を救済したいという慈悲の念により自由に寿命を伸縮できる生死である。これは菩薩修行五十二のうち第四十一位から五十位までの高い段階（十地）にある菩薩の生死で、意成身（意生身）ともいわれる。仁者はいのち長し（寿）という言葉や助ける者は助けられるという考えと一脈相通じるところがあるように思われる。

第十七頌から第十九頌までは、一切は唯識であることの論證にあてられた。その論證はすべてが阿頼耶識中の種子によってなされるということからの説明であつた。ただ煩悩をはなれた無垢清淨の業がどこから出てくるかに問題があるが、その種子も結局は阿頼耶識に基づくこととされたのである。

（五）三性説（三種の存在形態の説）

唯識三十頌は以上で、唯識の心識論についての説明を一通り終えている。第二十頌から第二十五頌までは三性説と三無性説にあてられ、その解説は成唯識論卷の八と卷の九にある。まず第二十頌を見よう。

由彼々遍計（さまたまな遍計（思量分別）により

遍計種々物 種々の物を遍計す。

此遍計所執 この遍計でとらえられるものの

自性無所有 自性は所有無し）

その主旨。凡夫が依他起である事物を計度するとき見分を我とし相分を法として執するがそれは迷妄で、そこに自性はない。

この頌は一切の事物は、性相の有無、仮実の観点より三類に分けた三性説の最初である遍計所執性を説くところである。遍計所執性とは、自我や事物の存在が衆縁の生じるところであることを知らずそれを固定化し、実体化する凡夫の心の働きをいう。この執着性は護法では第六意識と第七末那識の為すところとされ、安慧では八識のすべてであるとされるが、一般には護法説がとられる（竹村）。

さて第二十一頌は次のようである。

依他起自性（依他起の自性の

分別縁所生 分別は縁に生ぜられる

圓成実於彼 圓成実は彼に於いて

常遠離前性 常に前のを遠離せる性なり）

主旨。依他起性の本性である分別は、縁によって生じる。圓成実性は依他起性の上に働く遍計所執性を遠離したものである（太田）
第二十二頌はとくに圓成実性を説明する。

故此興依他（故に此と依他と

非異非不異 異にも非ず不異にも非ず

如無常等性 無常等の性の如し

非不見此彼 此を見ずして彼を見るに非ず）

主旨。故に圓成実性と依他起性とは異でもなく、不異でもない。無常性と無常なものとの関係のようなもので、圓成実性を見ずしては、依他起性は見えない（太田）

三性説は一切の事物を三類に分けたもので（一）遍計所執性は実体のないものに、凡夫が誤って実の事物だとする（妄有）のであり（二）依他起性は因縁によって生じた一切の事物で、存在するようにみえても（似有）、実は仮有にすぎないものである。（三）圓成実性は、煩惱、所知の二障を超えた所に現れる事物の本性で、真如、法性、涅槃と同じと言われる。

この三性論は譬喩をもつて説明されることが多いので、その一例をあげよう。はじめ麻からできている縄を見て、蛇と思い誤まり、やがてそれが縄であることが、わかった場合、蛇と思つたのが遍計所執の段階であり、それが縄であるとわかるのは、依他起性の段階であり、さらに縄が実は麻であるとわかったとき、圓成実性が現われた段階である（黒田）。

（六）三無性説

ここまでは三性を述べたが、それは実は無性であることを説くのが、次の第二十三頌から第二十五頌までである。

第二十三頌は次のようである。

即依此三性（即ちこの三性に依りて

立彼三無性

彼の三無性を立つ、

故佛密意説 故に佛は密意をもつて説く

一切法無性 一切法は性無しと

密意とは人の測り知らざる佛意のこと。つぎの第二十四頌は以下の通りである。

初即相無性（初めのは即ち相無性なり

次無自然性

次のは無自然性なり

後由遠離前

後のは前の所執の我法の

所執我法性

性を遠離せるに由る性なり）

第二十五頌は次の通りである。

此諸法勝義（此は諸法の勝義なり

亦即是眞如

また即ち是れ眞如なり

常如其性故

常に如にして其の性の故に

即唯識実性 即ち唯識の実性なり）。

まず第二十三頌では一切法無性という唯識の主張を繰り返し、次の頌に移る。初めの（遍計所執性）は無自性である。それは自性を有するものではないが故に、実体ではない。それで相無性と呼ばれる。次に無自然性または生無性は、依他起性の諸事物が因縁によつて生じ、あたかもさきの繩に実体がないように、実性がないことを言う。最後の無性は、執著されたわれや事物一切を遠離した圓成実性（眞如）のことで、勝義無性と呼ばれる。

繰り返して言えば、第一の相無性とは、遍計所執性を所依とする無自性であり、相とは体相の義で遍計所執性を指す。遍計所執性は妄想によつて現れる空華のようなものであるから、自性なく、体相すべて無であるということになる。次の生無性または無自然性では依他起性はこれに妄執するのが自然の性ではない故に、無性と言われる。終わりの勝義無性では、前の遍計所執の一切を遠離することによつて圓成実が実現するので、我や事物と認められる実体はないわけなので、勝義無性というのである（黒田）。

ここでは唯識の本質が説かれているが、それは否定的な表現をとれば、勝義無性であり、肯定的な表現をとれば圓成実性であり、真理である。この二面をあわせながら、しかも識を離れないことが、唯識の実性であるというのが第二十五頌のしめくりである（黒田、太田一九九四）。

ここで、唯識三性観について一言つけ加えたい。遍計所執性、依他起性及び圓成実性の三性を分別して、遍計所執性は心外のもので有に非ずと観じ依他、圓成の二性は心内に存して空に非ずと観ずるをいう。この観はその深淺に従つて五種に分けられ、五重唯識観と名づけられる（慈恩大師窺基の法苑義林章。黒田）。

（七） 発生観と意義観

終わりに、自然界の事物や事象また人間の存在のあり方について考えれば、その発生や生起とその意義や価値については、別々のものと見る必要があらう。人間を含め自然界の存在物はその誕生や生起を顧みれば、依他起性に外ならぬ。しかし佛や菩薩をはじめ歴代の祖師や悟境に達した人々やさらにそれぞれの道で前人未踏の極致に至った人々も、その発生や形成過程をみれば依他起のわく内にあるが、その意義、あるいは価値から見れば、独自の存在であり、真如に迫ることを認めざるを得ない。さらに一人の幼児の誕生と成長とにかけがえない意味をもつ母なるものは、たとえ匹婦、愚婦でも、独自の意義をもつ存在であるというべきであらう。西田幾多郎は、わが子を失った時の深い悲哀の念に言及しながら次のように記した。『死に子顔よかりき、をんな子のためには、親をさなくなりぬべしなど、古人もいったように、親の愛はまことに愚痴である。（中略）しかし余は今度この人間の愚痴というものの中に、人情の味のあることを悟った。カントがいった如く、物には皆値段がある。独り人間は値段以上である。目的そのものである。いかに貴重な物でもそれはただ人間の手段として貴いのである。（中略）而してこの人間の絶対的価値ということが、己が子を失うたような場合に最も痛切に感ぜられるのである。（中略）人間の仕事は人情ということを離れて、外に目的があるのではない。学問も事業も究竟の目的は人情の爲にするのである』西田、一九八〇）。本居宣長のものあわれ論の根底にあるのもこの人情の自然で、それをしっかりと認めないところには、正しい生活も正しい学問も成り立たぬというのが、彼のかたく信じたところである（小林秀雄一九九二）。

同時にこの哀切な悲しみの半面には多くの教訓が含まれていることも見のがし得ない。わが子の死によつて、『名利を思つて煩悶絶間なき心の上に一杓の冷水を浴せかけられたような心持がして、一種の涼味を感じるとともに（中略）、凡ての人の上に純潔なる愛を感じることが出来た』という西田の述懐は次のように続く。わが子の死のような場合において、『深く己の無力なるを知り、己を棄てて絶大の力に帰依する時、後悔の念は転じて懺悔の念となり、心は重荷を卸した如く、自ら救い、また死者に詫びることがができる』

このような場合は広い意味では煩惱に属するであろうが、その欲望の阻止、フラストレーションに際しては、西田の例に見られるように、菩提心を起こさせるための無上の機会となることもまれではない。これも煩惱即菩提の一つの場合と見ることができであろう。

(八) 修道論 その一

唯識三十頌の最後の五頌および成唯識論巻の第九の大半はいわゆる修道論と佛の境涯論にあてられる。唯識における修行の段階は、五位に分けられる。資糧位、加行位、通達位、修習位および究竟位である。最高位に悟入するには、これらの段階を漸次に修行し通過して行かねばならない。

まず資料位を説くのは第二十六頌である。

乃至未起識 (いまし識を起して唯識の性

求住唯識性 に住せんと求めざるに至るまでは

於二取隨眠 二取の隨眠において、なお未だ

猶未能伏滅 伏滅すること能わず)

はじめの二行は理解困難などがあるが、唯識の真実を悟ろうという気がまだ起きない段階にあるうちは、その障害となるものを排除しようとする気持ちも起さない(太田)ということであり、あるいは『唯だ識のみであることに識が住しないかぎり、その間は二取の隨眠は止滅しない』(竹村)ことである。

二取とは所取の取(対象への執著)と能取(主観への執著)の取であり、その熏習した種子(習気)が隨眠である。成唯識論は二取の習気を、所知と煩惱との二障であるといいかせている。煩惱障は我執から出る種々の煩惱であり、所知障は法執から出る種々の煩惱である。その二障には分別起のもの(俱生起(任運起))のものがある。

資糧位とは長途の修行の道中のための資糧を準備する段階で順解脫分とも呼ばれる。解脫すなわち涅槃に順じその因となる故である。この位の菩薩は、因、善友、作意と資糧との四つの力により修行を進める。因とは大乘成佛の因をもつこと、善友とは諸佛に出あうこと、作意とは心意を励ませて動揺させないこと、資糧は諸々の善根福智の功德を集積することである。またこの位の修行にも福德行と智慧行の二種があると説かれ、さらにこの段階の修行中に心に三種の退屈が生じることに注意を促がし、それから免れる『勇猛にして』退せざる道が示される。なお修行には自利行と他利行との区別もある。

加行位を説明するのは第二十七頌である。

現前立少物（現前に少物を立てて

請是唯識性 是れ唯識性なりと謂えり

以有所得故 所得有るを以つての故に

非実住唯識 実に唯識に住するには非ず

通達位において唯識の境に住する至る準備として、功を加え、前の二取をとり除くのが加行位である。この修行段階では対象的認識の範囲で、眼前に何ものかを立てるので、ただ識のみに住しているとはいえない。

成唯識論では加行位を煖・頂・忍および世第一法の四善根に区分する。煖とは見られるものがないという意味で二取空の真理のあたたかさを感じる段階、頂はそれが高められた段階、忍は能取空まで知る段階、世第一法は所取の境も能取の識も空になることを確調する段階で通達位に達する直前の状態である。

なお加行位で修められる観察の内容は四尋思といわれる。名・義・自性、差別が仮りの相であることを思量すること、名とは言葉、義はその意味、自性は事物の特性、そして差別とは他のものとの違いで、これらは仮有で実はないことを思考することである。

（九）修道論 その二

通達位は第二十八頌の説くところである。

若時於所縁（もし時に所縁に於いて

智都無所得 智都て所得なし

爾時住唯識 その時唯識に住す

離二取相故 二取の相を離るるが故に

この訓は太田に従ったが次の説明は竹村に従うことにする。もし、その時が来ると、認識対象を得ることが無くなったとき、ただ識のみということに住したのである。所取がなければ能取もない故である。

加行位の終わりに、真如に通達するので、通達位と言ひ、はじめて理を照らすので、見道と名づける。この位に、真見道と相見道が区別される。真

見道は無分別智が煩惱と所知の二障を断じ、我・法の空無が認知されることをいい、相見道とは真見道か得られた後にふたたび分別し、眞如の相分(認識の対境)をつくつて觀察する智である。この、後得智とは、正しく眞如に適合する智を無分別智または根本智というのに対して、その後に分れる一切差別の相を分別する分別智のことをいう。無分別智とは正しく眞如をきわめつくす平等智のことで、能取、所取の相を離れて平等に働く智をいう。無分別智と後得智については、相分と見分がともにないとする見解と、ともにあるという説と相分はなく見分があるという説とがあるが、護法は、無分別智では相分なく見分あり、後得智では相分も見分ともにありという説をとる。

見道(通達)位ではじめて無分別智を發して眞如を證するのであるか、それは十地のなかの最初の歡喜地から第七番目の遠行地までが属する。十地は修行の五十二位のうち第四十一位から五十位までをいう。なお、資糧位は、十住(境地)と十行(行動)および十廻向の最終段階を除く九つの段階(第十一位―四十位)に分けられ、資料位の前の段階は十信に分けられる。

(十) 修道の進展

修習位を説くのは次の第二十九頌である。

無得不思議 (無得なり不思議なり

是出世間智 是れ出世界の智なり

捨二麤重故 二の麤重を捨するが故

便證得転依 便ち転依を證得す)

この意味は、『これは所取を遠離し(無得)、能取を遠離する(不思議)する。そしてそれは出世間智であり、転依である。二種の麤重を断じたが故に』ということになる。二種の麤重とは煩惱障と所知障のことである。さて修習位で轉依を證得する道筋とは、「十地の中に十の勝行を修し、十の重障を断じ十の眞如を證して煩惱と所知との二種の転依を得ること」なのである。

まず心境の深まるに應じて展開される環境世界をば地といい、その十段階の地を十地という。

(一) 極喜地(歡喜地) はじめて二空(我空と法空)に接して、喜びのきわみになる境地。

(二) 離垢地 戒律を具えて、よく煩惱の垢を離れる境地

(三) 發光地 禪道を学び、智慧が光を發する境地。

(四) 焰慧地 煩惱を焼く智慧の光が増して焰となる境地。

(五) 極難勝地(難勝地) 眞と俗との二智が相応して働く地、極めて難しいことを示す。

(六) 現前地 正しく眞如を会得する無分別智すなわち平等智を生ぜしめる境地。

(七) 遠行地 一切の相を離れた観法によって遠く上方に赴く境地。

(八) 不動地 無分別智が自然に続き、万有の事相や効用や煩惱によって動かされぬ境地。

(九) 善慧地 言葉を自在に駆使して、説法ができる境地。

(十) 法雲地 最高の智徳が、一切に充滿する境地である。

次に十の勝行とは、施、戒、忍、精進、静慮、般若(以上六行にはそれぞれ三種を含む)、および願、力、智(以上それぞれ二種を含む)であり、前の十地のそれぞれでおさめる修行である。たとえば、極喜地では、財施、無畏施および法施の三布施行が修められ、極難勝地では、今の境遇を安んじて受け入れる安住静慮、精神力を引き出す引發静慮、何か衆生のためになるかをわきまえる弁事静慮の三静慮の修行が修められ、不動地では、自己の向上を願う求菩提願、衆生の利樂を願う利樂他願の二願が修められ、善慧地では、思沢力(思索の力)と修習力(実行力)が修行されるのである。十勝行はそれぞれが二あるいは三に分類され、合計二十六勝行になる。

十勝行によって断捨されるのが、十重障である。

(一) 異生性障、分別起すなわち後元的な煩障および所知障のようすで、極喜地で断捨される。

(二) 邪行障、俱生起の所知障の一部と身口意の邪行を起こす障が、離垢地で断ぜられる。

(三) 音鈍障、俱生起の所知障の一部で教法を開き、思量し実践するとを障げるもので、発光地で断ぜられる。

(四) 微細煩惱現行障 俱生起の所知障の一部で第六識の上の悪見で、焰慧地で断ぜられる。

(五) 於下乘般涅槃障 俱生起の所知障の一部で現実の生死を厭い、安らかな涅槃に入ろうとする障で、極難勝地で断ぜられる。

(六) 麤相現行障 俱生起の所知障の一部で、染と浄とを対立的に見る障で、現前地で断ぜられる。

(七) 細相現行障、前項と類似しているが、生と滅とを対立的に見る障で、遠行地で断ぜられる。

(八) 無相中作加行障、所知障のなかの俱生起の一部が無相の眞実を離れざる障、不動地でこれを断じ得る。

(九) 利他中作加行障、これも所知障の中の俱生起の一部で、衆生の利樂につとめず自利に走る障、善慧地で断ぜられる。

(十) 於諸法中未得自在障、所知障中の俱生起の一部が、諸法において自在を得させない障であり、法雲地において断ぜられる。各段階において證せられる十眞如は次の通りである。眞如に差異があるのではないが、證せられる眞如の側面を強調しているのである。

(一) 遍行眞如 眞如が一切の事物にあまねきことをいう。

(二) 最勝眞如、眞如が無辺の徳をそなえ、一切の事物において最勝なることをいう。

(三) 勝流眞如、眞如より流れ出る教えがきわめて勝れていること

(四) 無攝受眞如、眞如が繫縛されることがない面

(五) 類無別眞如、平等にして差別を超えた面

(六) 無染淨眞如 眞如が染淨を超えた面。

(七) 法無差別眞如、諸種の教法の上に成立しているが、眞如自体は同一であるという面。

(八) 不増減眞如、増減の執を離れた面

(九) 知自在所依眞如 説法において自在を得る面

(十) 業自在所依眞如 一切の神通の作業、善の保持、禪定において自在を得る面。

これらの眞如の面は十地のそれぞれに於いて證得せられる。

以上は第二十九頌の転依すなわち修行者の人間が変わることの積極的な因となるもの、四種の能證因について述べたが、次には、能證因によって得られる結果すなわち所證果についていう。轉依の意味は次のように四種類に分けられる。

(十一) 修道の結果——所證果

一 能転道 積極的に転依をすすめる修行

① 能伏道 煩惱と所知の働きを断ずる

② 能断道 この二つの種子を断ずる修行

二 所転依 前の修行により転換されるもの

① 持种依 種子を保持する阿頼耶識

② 迷悟依 迷悟の根本である眞如

三 所転捨 修行によって捨棄されるもの

① 所断捨 煩惱障、所知障の種子

② 所棄捨 とくに障害とならぬ種子でも積極的に価値なきものは棄てられる

四 所転得（修行によって得られるもの）

（一） 所顯得 修行で得られる佛のさとり、大圓寂入（大般涅槃）のこと。四種あり。

① 本来自性清淨涅槃。一切のものに存在する真理そのもの。

② 有余依涅槃 身体を持ちながらの涅槃

③ 無余依涅槃 身体も苦痛も消えた寂滅の境地

④ 無住処涅槃 生死にも涅槃にも住せず衆生を利樂する境地

（二） 四智菩提 八識の全体を轉じて得られる一切の煩惱妄想を離れた四種の最高の智慧をいう。

① 大圓鏡智、一切の事物をそのままに映し出す智慧、第八識が轉じて成る。

② 平等性智 一切の衆生に平等に大悲を起す智慧、第七識が轉じて成る。

③ 妙觀察智、一切の事物をよく觀察して自在に法を説く智、第六識の轉。

④ 成所作智、一切衆生の利樂のために完全な行動を起す智慧で、前五識が轉じて成ったもの。

修行が完成すると、八識がこのように四つの智慧に轉じる佛果を得るのであり、自覺されなかった眞如がまどかに実現し、八識がすべて智として働き、とりわけ自在に利他の行につくことになる（竹村）。

以上で修道論は終わる、つぎは究竟位であり、佛身論である。唯識三十頌の最後の一頌である。

（十二） 究竟位・佛果成就の境位

此即無漏界（これは即無漏界なり）

不思議善常 不思議なり、善なり、常なり

安樂解脱身 安樂なり解脱身なり

大牟尼名法 大牟尼なるを法と名づく

成唯識論（卷の十）によれば「これは」とは、前頌で得られた転依の結果（究竟位）で、全く煩惱を離れた清浄の世界すなわち無漏界である。またそれは思考や言語をこえており、善であり、永遠で常であり、安樂であり、煩惱を離れた解脱身であり、釈尊であり、法身である。法身は佛身の全体で三種に分けらる。第一の自性身は眞如であり、第二の受用身は修行の結果を受用する身で四智を内容とし、報身ともよばれる。そのうち自受用身は、自ら法悦を味あう境地であり、他受用身は利他の活動をいう。第三の変化身は佛が十地前の人々を救うために変化した姿で、化身ともいわれる。このように、唯識は修行者が仏に成ることを目ざし、自在に自利、利他を行いうるようになることを念願する。これらの仏身に対応して仏国土（仏土）がある。自性身には佛性土、報身には報土（自受用土と他受用土）、化身には凡夫の五感にうつった化土が対応する。

終りに唯識三十頌は、願文をつけ加える。

『己に聖教と正理とに依つて

唯識の性と相との義を分別す。

所獲の功德をもつて、群生に施し

願わくば共に速かに無上覺に登らん』

（十三） 時間的展望と四智の体験

唯識心理学が普通の西洋心理学と異なる重要な点は、人間の生活を少くとも三世にわたって視野に収めていることである。どんな資質をもつてどんな境遇に生れるかは、最近では遺伝行動心理学が対象としようとする問題であるが、今の段階では未だ力の及ばぬ領域である。一般に修道論やそれ以降に述べられた諸問題は、現代心理学では対象外の問題としてとりあげられないのが常である。

なお修道論では、修行には三大阿僧祇劫を必要すると云われる（成唯識論述記）。まず資糧と加行の二位では、一大阿僧祇劫が経過し、菩薩の十地のうち、初地から第七地までの間に一大阿僧祇劫が、さらに第八地から十地までにまた一大阿僧祇劫、都合三大阿僧祇劫という長遠の時間が経過するという。この時間的長さについては、異説もあるが、いずれにしても非常に長い時間の努力が必要であることを意味すると解される。

したがって修行者が菩提心を起こして佛の位に達するまでには、幾度か生死を繰り返し、無数の時間の経過が必要であるとする見解がとられている

のである。このことは、人の生涯を、幾多の生死を含む長遠の時間的展望の下にとらえる見方で、普通の見解をはるかに超えたものである。人生を今生だけに限るのではなく、さらに幾生にもわたる生涯の展望のもとにとらえるので、希望も絶望もはるかに長大な時間的単位でとらえるものである。

なお加行位の時間的な長さについては、非常に短い体験という説もあるということを、つけ加えておきたい(太田)。

このように真に解脱に達し悟りに入るためには、一般に何代にもわたる輪廻転生を繰り返した長期の修行が必要であるといわれる。ところが現在生きている人が、何ほど修行をし何代転生を繰り返した人であるかは普通の人にはわからない。ある宗派の祖師と仰がれるほどの導師には往々幼少の折から超凡の資質を示し、道に志ざす人があるが、このような人は前世においてすでに比類なき修行をなし終えた人かも知れぬ。紀野一義は浄土宗の辨栄聖者をそのような人とみなしている。光明主義の唱導した辨栄聖者は若い時から超人的な修行にいそしみ、稀有の五眼を開発し、四智という最高の境地を手に入れた人であると言われる(紀野一義一九七八、一九八二) 四智すなわち大圓鏡智、平等性智、妙觀察智および成所作智についてもその体験をもとに明快な解説をなし得る人は、明治以降ではこの人を除いては一人もいないとみられる。このように、この世においてほぼ修行を完成した人も、まれには存在すると思われる。なお前世の存在については、西洋においても最近いくつかの文献が見出される(ワイズ二〇〇二)。これらの超常現象についての研究は将来の課題と言えるであろう。

なお先師千葉胤成は、生前、辨栄聖者の法嗣笹本戒浄に接する機会をもち、その後長子笹本浄光を専攻生として受け入れ、大戦中南方で戦死するまで親交をかさね、唯識とともに学んだ(千葉一九五九、一九七二)。

私はかつて東北大学心理学茶話会で田中木叉の辨栄聖者についての講演を聴き、一九六二年には千葉の縁で芦屋市の光明会本部聖堂で觀無量寿経に則ったその修行の一端にふれる機会を得た。

本文の成唯識論のテキストは国訳大蔵経論部第十卷(国民文庫刊行会出版)に従った。

文献

- 太田久紀(一九九四) 唯識三十頌要講(改訂版) 中山書房 仏書林
北村晴朗(一九九一) 自我の心理續考 川島書店
北村晴朗(二〇〇二) 全人的心理学―仏教理論に学ぶ 東北大学出版会
紀野一義(一九七八) 名僧列伝(念佛者と唱題者二) 文藝春秋社
紀野一義(一九八二) 心ひたすらに―忘れ得ぬ人々二 角川書店
黒田亮(一九四四) 唯識心理学 小山書店

- 小林秀雄（一九九二）本居宣長（上下）新潮文庫
高崎直道（一九九二）唯識入門 春秋社
竹村牧男（一九九二）唯識の探求 唯識三十頌を読む 春秋社
千葉胤成（一九五九）笹本戒浄「成唯識論の心理説」について 大脇教授在職三十五年記念論文集
千葉胤成（一九七二）たましいを追うて―千葉胤成著作集四 協同出版
西田幾多郎（一九八〇）思索と体験 岩波文庫
服部正明（一九七五）瑜伽行としての哲学 服部正明・上山春平 仏教の思想（四）認識と超越（唯識）
ブライアン・ワイズ（山川紘矢・全亜紀子訳）（二〇〇一）魂の療法 P H P 研究所
角川書店